

縄文時代から中世の大沢谷内遺跡

相田泰臣（新潟市文化財センター）

はじめに

最初に「大沢谷内遺跡展」を企画した経緯についてお話をします。大沢谷内遺跡ではこれまで25回の発掘調査を行っており、2013年に私も1年間だけ調査を担当しました。2013年に調査を行った場所についてはその後、2015年に報告書を出しました。さらにその後、2020年の3月に、大沢谷内遺跡で未報告だった場所について、それまでの調査成果も含めて報告書をまとめたという経緯もあり、今回企画をしたという流れがあります。

また、大沢谷内遺跡では、新潟市から田上町、加茂市を抜けて三条市へと伸びる国道403号線の建設が発掘調査の原因の大部分を占めているわけですが、それが去年の3月に新潟市と田上町との間で開通したということもありまして企画をしたわけです。

大沢谷内遺跡ですが、縄文時代から室町時代までの遺跡です。一番古いのは縄文時代晩期で、紀元前2,500年くらいからでしょうか、一応その時期が、大沢谷内遺跡で一番古い遺物が出ているということになります。もう少し細かく言うと、縄文時代晩期の中ごろの土器が出てきます。

その後ですが、弥生時代や古墳時代の遺物も少ないながら出土しています。また、そのあとは飛鳥時代、おおむね7世紀になりますが、さらに奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代と、長期にわたって集落が営まれた遺跡と言えます。

これは私が調査をした場所の、調査終了後に撮影した写真になります(スライド1)。私が調査をしたのはこの部分ですが、この工事をしている場所が403号線になります。右側が新潟市の方角ですね。左側が田上町のほうに抜けて行く道路で、今は全面供用開始しており、非常にいい道路ができております。私はその乗り入れ部分の調査を担当いたしました。信濃川からちょうど1km丘陵側に入った場所に大沢谷内遺跡は位置しております。今は秋葉区になりますが、旧小須戸町の遺跡です。

大沢谷内遺跡は秋葉区の新津丘陵と信濃川に挟まれた、標高約4mの沖積地に位置する遺跡です(スライド3)。大沢谷内遺跡の範囲は東西800mくらい、

南北で1,300mくらいの広い遺跡です(スライド4)。また、大沢谷内遺跡の北100mのところには大沢谷内北遺跡という遺跡もありまして、大沢谷内遺跡とつながりをもった遺跡であるというふうに考えられます。

これは信濃川のほうから撮影した写真で、菩提寺山だとか護摩堂山などの丘陵が、遺跡から1km東側にあるというような位置関係になります(スライド5)。これが403号線です。この403号線の調査が大沢谷内遺跡の主要な調査原因になっています。

この図のスクリーントーンのちょっと濃くなっている部分が、大沢谷内遺跡の周知範囲ということになります(スライド6)。さらに、その中でまた濃くなっている所が、発掘調査をした地点です。大沢谷内遺跡ですが、調査地点によって、北から大沢谷内北遺跡があって、さらに大沢谷内遺跡の1区、2区、3区、4区、少し離れて5区、6区、7区、8区、9区、10区、11区というふうに、調査場所によってそれぞれ調査区の名称を付けています。今日の話の中で何区などという話が出てきますが、調査場所によって1から11までの数字が付けられているということ聞いていただければと思います。

また、これは大沢谷内遺跡から出土した土器を時代順に並べた図になります(スライド7)。右側には大沢谷内遺跡の5・6・7区から出てきた遺物を、左側には大沢谷内遺跡のそれ以外の地点や、あと大沢谷内北遺跡から出てきた遺物を示しているという図になります。調査区によって中心となる時期が違ったりしているので、その辺もまた見ていきたいと思います。

それでは、縄文時代から中世までの大沢谷内遺跡ということで、時代順に縄文時代、弥生時代・古墳時代、飛鳥時代・奈良時代の前半、奈良時代の後半・平安時代、最後に鎌倉時代・室町時代という順番でお話したいと思います。ちなみに、飛鳥時代・奈良時代・平安時代を古代、鎌倉時代と室町時代を中世と呼ぶということで、今回お話をさせていただきます。

縄文時代

スライドに映っているのが縄文時代の大沢谷内遺

跡および大沢谷内北遺跡の遺構の平面図になります(スライド9左)。右側には同じ図を一部拡大しています(スライド9右)。緑色に塗ってある部分が竪穴住居で、赤く塗ってある所が掘立柱建物、溝や谷などは青色で示しています。大沢谷内遺跡と大沢谷内北遺跡をあわせると、まず竪穴住居が17棟見つかっています。大沢谷内遺跡の3区ですとか4区で15棟見つかっています。この4区の南側に谷と示してありますが、幅が100mくらいの谷が存在していたということがわかっていて、その谷の北側と南側とでちょっと時代が異なりますが、北側では竪穴住居が15棟で、谷を挟んだ南側の6区という所で、竪穴住居が2棟見つかっています。掘立柱建物は15棟見つかっていて、この3区、4区で7棟、南側の6区で8棟見つかっています。

建物以外では、焼土遺構という土が焼けた遺構が非常に多く見つかりまして、大沢谷内北遺跡で3基、大沢谷内遺跡の3・4区で37基、6区で60基の土が焼けた地点が確認されています。

出土する土器を見ると時代や時期が分かるのですが、3区や4区といった谷の北側の大沢谷内遺跡の調査区から出てきている土器というのが、縄文時代の晩期の中葉という時期で、大沢谷内遺跡で一番古い土器となります。一番古い資料が、この3区、4区周辺で見つかっています。そのあとですが、この谷を挟んで南側の5区や6区では、もう少し新しい時期の資料が見つかっていて、スライド7の右上の図になりますが、縄文時代晩期の後葉の時期の資料がこの5区と6区で見つかっています。

また、大沢谷内遺跡から北へ100mに位置する大沢谷内北遺跡ですと、そこでも縄文時代の晩期の中葉の時期の遺物が見つかっているのですが、大沢谷内遺跡の1～4区の資料よりも新しい時期の遺物となります。ただし、5区と6区、7区の資料よりは古い時期の資料が、この大沢谷内北遺跡では見つかっています。

これは大沢谷内北遺跡の平面図です(スライド10右)。左下のほうから右上、北東方向に向かって地形が下がっていて、その傾斜に合わせて杭の列が見つかっています。写真のような櫂、舟をこぐ時の木製具が出土しています。この先端部分も非常に精巧に加工してあります。それと櫛ですね。赤い漆を塗った櫛なども見つかったりしています。近くに船着き場があったのではないかと考えられています。

縄文時代の流れをまとめますと、最初に1区から

4区という所で、大沢谷内遺跡の中で一番古い時期に活動が見られ、そのあと大沢谷内北遺跡というさらに北側のほうに移動をしています(スライド11)。その要因ですが、この時期に谷が崩れていることが発掘調査で分かっており、そのような自然環境の変化によって移動したのではないかと考えられています。さらに縄文時代の晩期後葉の時期になると、今度は谷を挟んで南側の5区、6区という所に、また移動をしているというような動きになります。

これは大沢谷内遺跡の竪穴住居です(スライド12)。いずれも丸い形の竪穴住居が見つかっています。これが近景の写真です(スライド13)。周りに壁溝を伴う竪穴住居です。それと掘立柱建物です(スライド14・15)。地面に直接柱を立てた建物で、このような掘立柱建物も確認されています。

これは縄文時代晩期中葉の土器です。浅い鉢ですとか煮炊きに使用する深い鉢、それと壺も出ています(スライド16)。

大沢谷内遺跡や大沢谷内北遺跡の土器を見ると、精製土器、磨いたり赤く塗ったりしてきれいにつくられた土器というのが2割前後です(スライド17)。粗製土器、特にきれいに調整をしないような土器というのが7割から8割ということで、粗い土器が非常に多いという傾向があります。

また、出土している石器を見てみると、特に大沢谷内北遺跡や大沢谷内遺跡の6区で点数自体が少ないと言えます(スライド18)。その石器について、食べ物の調達や加工に用いた石器である石鎌や磨石、石皿、それと工具的な性格の強い石器、斧ですとか石匙など、あと非実用的な石器で、石棒や石剣など祭祀などに使った石器ということで、3つに一応区分をしてみると、大沢谷内北遺跡や大沢谷内遺跡の6区では、ほぼ100%、調理加工に用いた石器しか見つからないというような状況です。大沢谷内遺跡の1区から4区もおおむね同じような傾向ですが、こちらのほうでは工具的な性格の強い石器も少し見つかっているという違いがあります。ただし、非実用的な石器はほとんど見つからないというような状況です。この時期のほかの遺跡と比べると、こういう石器組成のあり方に大きな違いが見られるという指摘がなされています。

また、大沢谷内遺跡ではアスファルトの塊が縄文時代から中世まで見つかっています。これは縄文時代のアスファルトの塊が出土した時の写真です(スライド19)。これは大沢谷内遺跡の縄文時代の石鎌で

すが、この鏝の根元部分に接着に使ったアスファルトの付着が認められます（スライド20）。他にも、アスファルトが付着した土器や磨石、敲石などが出土しています（スライド21）。少し拡大した写真を見てください（スライド22）。アスファルトの塊が、このような状態で遺跡から出土しています。これは敲石に付着したアスファルトで、アスファルトの加工などに伴って付着したと考えられています。アスファルトが付着した土器もたくさん出ていますが、スライド22右下の写真は土器の破片どうしをアスファルトによって接着している資料となります。

これも土器の内側ですが、この茶色い部分がアスファルトで、上部が水平に付着しているので、これは液体の状態です。土器の中に入れて付着したと考えられている資料となります（スライド23）。

これもアスファルトが付着した土器の外側と内側です（スライド24）。内側にもびっしりアスファルトが付着していますが、外側にも流れたようなアスファルトの痕跡が見られます。下の写真は、新潟市文化財センターでアスファルトの塊を土器の中に入れて、火を掛けて液体状にした実験の時の写真です。煮こぼれたりして、上の写真の土器と同じような痕跡が付いたということで、この土器はアスファルトの溶解に使った可能性が考えられている資料となります。

アスファルトの塊ですが、これまでの調査で縄文時代のもので89点見つかっています（スライド25）。古代・中世、飛鳥時代から室町時代全体になりますが、全部で853点のアスファルトの塊がこれまでの調査で見つかっています。全体の重量を見てみると、縄文時代が5,200gくらい、古代・中世になると出土点数と同様にぐんとびっしり出てきて、およそ22,000gのアスファルト塊が出土しているといった状況です。

このアスファルトの塊ですが、大きく分けて2種類に大別できます（スライド26）。1つは上の写真のようにつるつると言いますか、均質・緻密で、不純物を含まない、非常にきれいなアスファルトの塊と、もう1つは、木の未分解有機物や砂礫などの不純物を含むもの、そういった2種類のアスファルトの塊が見つかっています。縄文時代は、きれいなほうよりも、不純物を含んだアスファルトの塊が多いという状況です（スライド27）。また、古代・中世になると、不純物を含んだアスファルトの塊がほぼ全てというような状況です。

阿賀野市でもアスファルトが出る遺跡が見つかっ

ており、さまざまな実験をされているのですが、不純物を含むアスファルト塊のほうが、不純物を含まないアスファルト塊よりも接着力が強かったというような報告もありまして、そういったことも割合に影響している可能性があると考えております。

もう1つ、縄文時代の遺構の中で焼土遺構、土が焼けた遺構も非常に多く見つかっています（スライド28）。この赤い部分が土が焼けている部分です。炭や灰なども、その焼けた土の周りから見つかります（スライド29）。ここは遺構の断面部分にあたりますが、赤い土が見られ、さらに間層を挟んでまた土が焼けた層が見られるので、1回だけではなくて複数回にわたってこういう焼成行為を行ったということがわかります。

その焼土遺構からどういったものが出るのかということですが、焼けた骨がたくさん出土しています（スライド30）。分析をしてもらった結果、トゲウオ科とサケ科が大半を占めていました（スライド31）。それ以外では、コイ科ですとかハゼ科、トビエイ科、その他ということです。魚類以外にも若干出ていますが、ほとんどが魚類の骨という結果が得られています。トゲウオ科にしてもサケ科にしても、河川を遡上、回遊してくる魚で、調べてもらった結果、大きさも大型のものから小型のものまで見られたということで、異なる季節に獲得した状況が推測されています。また、トビエイといった海洋魚も見られることから、日本海までの活動範囲などが考えられています。ちなみに、トゲウオ科やサケ科の中には稚魚も多く含まれるということで、網を使った漁撈も行っていたことが指摘されています。

花粉分析に関しては、樹木花粉ですとハンノキ属やブナ属が多いということで、周辺の環境としてはジメジメした湿地が広がっていたと推定されています（スライド32上）。湿地の中の高い所を利用して活動を行っていたと推測されます。ちなみに、弥生・古墳時代でも、古代・中世でも、同様な花粉の傾向が見られます。

縄文時代の大沢谷内遺跡あるいは大沢谷内北遺跡の性格ですが、これまで見てきた土器の組成ですとか石器の組成など、一般の集落とは違いがあるということで、特殊な性格の遺跡なんだろうと考えております。定住集落というよりは、ほかに拠点となる集落があって、キャンプサイト的に、大沢谷内遺跡の場所に人がやってきて、アスファルトなどの物資の流通などに利用した遺跡だったのではないかとい

う指摘があります。

弥生時代・古墳時代

次に弥生時代と古墳時代についてですが、大沢谷内遺跡ではこの時期の資料は非常に少なく、遺構についてもはっきりしない状況です。

これは弥生土器です(スライド34・35)。弥生時代の後半の土器です。古墳時代の遺物も非常に少ない状況です。こういった古墳時代の甕(スライド36・37)も見つかってはいますが、非常に少ない状況です。これも古墳時代の土器で高杯です(スライド38)。翡翠の勾玉も出ています。

これは大沢谷内遺跡周辺の古墳の分布を示した図です(スライド39)。大沢谷内遺跡の範囲がここで、丘陵のほうには古津八幡山遺跡や古墳であったり、三沢塚、通称円塚古墳ですとか、あとエゾ塚古墳など、丘陵のほうに古墳が点々とあるので、場合によっては大沢谷内遺跡の周辺に、まだ見つかっていない弥生時代ですとか古墳時代の集落があったりして、古墳についてもまだ見つかっていない古墳があるのかもしれない。ただ今のところは、はっきりわかっていない状況です。

飛鳥時代・奈良時代前半

次に飛鳥時代と奈良時代前半について見ていきたいと思います。

これが大沢谷内遺跡の3・4区の写真になります(スライド41)。ちなみに、時代が新しくなるにつれて土が堆積していくので、遺跡の調査を行う時には新しい時代の遺構を最初に掘るわけです。この3・4区という場所ですが、縄文時代の遺構や遺物も見つかっているので、調査を行う順番としては、最初に飛鳥時代の調査を行ったあとに、さらに掘り下げて縄文時代の調査を行ったというような経過になります。これはその上層の飛鳥時代の調査の写真ということです。左側が北、右側が南の方角になるのですが、南側では、縄文時代でもお話ししたように、古代・中世にも谷が存在していました。

これは上層の遺構平面図です(スライド42)。上が7世紀後半の飛鳥時代の遺構平面図で、この茶色く塗ってあるのが掘立柱建物です。赤く線状にあるのが杭列、柵ですね。またこの緑色に塗ってあるのが遺物が集中して出た遺構で、谷への落ち際、斜面の落ち際の場所で見つかっています。飛鳥時代にはこの2か所で、奈良時代前半には3か所で、遺物が集中する遺構が見つかっているということです。ほかに井戸が2基見つかっています。

実際の写真を見ていきたいと思います。これが谷の写真です(スライド43)。右側が南で、本来もっと谷が落ち込んでいくのですが、調査では全部を下げきったわけではなくて、一部だけ下げるといって調査を行っております。その谷への斜面、落ち際からは遺物が集中してまとまる地点が確認されています(スライド44)。須恵器ですとか、木製品なども出土しています。これは斎串です(スライド45)。祭祀に関連して使う資料です。また、鏃形の木製品も出ています(スライド46)。その遺物集中遺構ではこういった土器も出ています(スライド47)。例えばこの須恵器の高杯ですと、口の部分、器の部分が欠けて出土しています。おそらく意図的に打ち欠いているのだと思いますが、そういった儀礼行為を行った場所と考えられます。

ほかにも、土製の中央に穴をあけた円盤形の土製品ですとか、先ほどの写真でも出た斎串、鏃形の木製品、刀形の木製品、弓形の木製品、舟形の木製品なども出ています(スライド48)。ほかにも鉄鏃や刀子なども出土しています。

SX945という遺物集中遺構については、土製円盤や斎串などが、このような分布で出土しているということで(スライド49)、これはその想像イラストになります(スライド50)。このように、律令時代には斜面、谷の落ち込み部において、水辺の祭祀儀礼を行っていたのだらうと考えられます。

大沢谷地遺跡のすぐ近く、田上町になりますが、行屋崎遺跡という遺跡があり、そこも飛鳥時代の遺跡です。これは大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡の祭祀遺物を比較した表になります(スライド51)。例えば、斎串はどちらでも出ていますが、刀形の木製品は大沢谷内遺跡では出ているのですが、行屋崎遺跡では出ていません。鉄製品については、鉄鏃や刀子は大沢谷内遺跡では出ていますが、行屋崎遺跡では出ていません。代わりに、行屋崎遺跡では鈴ですとか、耳環と呼ばれる耳飾りが出ていたりします。あと行屋崎遺跡では土製品が多く出ていて、手づくね土器ですとか、人形の土製品、それと動物形の土製品なども出ていますが、大沢谷内遺跡ではそのような土製品は出ていません。どちらかという于行屋崎遺跡のほうが古い傾向があると言えるかと思っています。

大沢谷内遺跡の斜面の遺物集中地点では、九九木簡も出ています(スライド52)。左側に積文を入れています。九九の練習をした木簡が出ています。間違いが多かったりするのですが、例えば七九六十

一ですとか、七九四十七ですとか間違えたりしています。一般集落では出土しない資料で、役所関係、役人がいたということをよく示す資料と言えます。

これはアスファルトが付いた飛鳥時代の平瓶です(スライド53左)。また、こちらは漆が付着した横瓶と呼んでいる、液体を入れる瓶です(スライド53右)。ちなみに、大沢谷内遺跡では平安時代の出土品として、漆要具、繊維状のものに漆が付いていて絞ったような状態の資料も出ており、漆の生産から漆の利用なども行っていたということがわかっています。

ほかに飛鳥時代の資料としては、縄文時代でも出ていましたが、木製の櫂、舟をこぐ道具ですとか櫛なども出ています(スライド54)。右側2つが櫂で、大きめの櫂もあったりします。また、農具である木製の鋤なども出ています。

これも珍しいというか、なかなか出ない資料ですが、円面硯と呼ばれる硯も見つかっています(スライド55)。左上が飛鳥時代の円面硯で、右側が奈良時代前半の円面硯です。下に参考としてイラストがあります。全体が残っていないのですが、丸くなっている部分に墨を入れて利用します。これはその脚の部分で、花の文様、花卉のような文様を線刻した硯です。また、左下の写真ですが奈良三彩の壺です。白だとか緑だとか褐色の釉を塗った焼き物ですね。これも一般集落ではまず出ない資料です。これらは、大沢谷内遺跡が役所に関連した遺跡であることを推測させる資料と言えます。

ほかにも、鍛冶の際に空気を送り込むための筒状の送風管である羽口や、鍛冶の際に出る鉄滓なども出土しています(スライド56)。これは紡錘車と呼んでいる機織りの道具です。右下の写真は、須恵器の甕の肩のところに、須恵器の杯、お茶椀が溶着した資料になります。これは失敗品なので、遺跡の近くに須恵器の窯があったかもしれないということを推測させる資料です。窯はまだ見つかっていません。これらの資料は、集落の中で、機織りや鍛冶も行っていたということを示す資料かと思います。

また、飛鳥時代の遺構としては、このように丸木舟を井戸側に転用した井戸も見つかっています(スライド57)。

これは飛鳥時代の土器です(スライド58)。注目されるのがこのように外面を磨いている土器です。通常、この時期ですと、木の板目でなでたりするのが新潟では一般的なのですが、このように外面を磨いた土器なども出ていたりしています。

飛鳥時代には日本書紀の中で、越の国から燃ゆる土と水を、天智天皇のいる滋賀県の大津宮まで献上したという記載があります。大沢谷内遺跡はこの記事と同じ時期の遺跡でもあり、アスファルト塊を出土しているということで、その関連性についても注目されます。

また、7世紀は淳足柵だとか磐舟柵など、新潟が注目される時期と言えるかと思いますが、まだよくわかっていない時期でもあります。新潟県埋蔵文化財センターの田中祐樹さんは、先ほどの土器や行屋崎遺跡の土器も含めて、東北との関連ですとか、また、東北でも具体的にどの辺と交流があったのかといった研究も進めているので、今後、そのあたりの研究の進展が期待できるかと思います。

奈良時代後半・平安時代

続いて奈良時代の後半から平安時代ということで見ていきたいと思っています。

先ほど飛鳥時代と奈良時代のお話をさせていただきましたが、その時期の遺構は1区から4区の地点で見つかっています(スライド60)。谷を挟んで南側に行きますと、飛鳥時代や奈良時代前半の資料はほぼ見つかっていない状況なので、時代によって利用する空間が変化したということがわかっています。

奈良時代の後半、おおむね8世紀の後半になると、1～4区では資料がなくなって、代わりに谷を挟んだ南側で、遺構や遺物が多く確認できるようになります。奈良時代の後半から平安時代の遺構については、掘立柱建物が21棟、井戸が31基、耕作関連の凹地状遺構、これは主に水田として利用していたと考えられる四角い落ち込みの遺構ですが、これが14基見つかっています。あと畝状遺構と呼んでいる畑の畝間の溝も見つかっています。

右側が拡大した図になりますが、この赤いところが掘立柱建物です。大沢谷内遺跡では、これまでに奈良時代や平安時代の竪穴住居は見つかっておらず、建物についてはいずれも掘立柱建物です。それと、紫色で示してありますが、井戸が31基出ています。また、青く塗ってあるのが溝や水田などの遺構です。9区の青く塗ってあるのが水田に関連した遺構ということになります。

大沢谷内遺跡の8区という所では、コの字状の雨落ち溝の内部で掘立柱建物が確認されています(スライド61)。これは拡大した写真です(スライド62)。作業員さんが立っている所が柱の場所です。2間3

間の建物が見つっています。

これはその柱の断面、半分に割った状態の写真になります(スライド63)。この建物は、こういう四角い形の柱穴が掘られていたということです。新潟県では柱穴は基本的に円形が多く、四角形の柱穴はやや格の高い建物に多い傾向があるかと思えます。これはその掘り上がりで、ここが柱の部分です(スライド64)。これはその排水用に建物の周りに掘られた雨落ち溝の断面です(スライド65)。このような建物も見つっています。

それと大沢谷内遺跡では古代・中世を含めて水田が見つっています(スライド66)。図の左側が平面図、右側が写真です。この黄色く塗ってあるのが中世の水田で、赤く塗ってあるのが古代の水田の跡です。また、格子状に筋のようなものがありますが、これは古代の耕作痕です。中世の水田の下にも古代の耕作痕が見つっているのも、古代にはこの赤い部分だけではなく、もう少し広い範囲で水田が広がっていたことになりませんが、中世の水田で壊されて、中世の水田がある所についてははっきりしない、耕作痕だけ確認できるということになります。

これは平安時代の井戸です(スライド67)。これはその断面で、掘り進めていくと丸木舟を転用した井戸枠、井戸側が見つっています(スライド68)。

これもまた別の平安時代の井戸側をもつ井戸の写真です(スライド69)。これはその断面で、この井戸も丸木舟を転用した井戸側が井戸に設置されていました(スライド70)。こんな状態で設置されていたということです(スライド71)。これはその井戸側を持ち帰ってきた写真ですが、この面で左右がつながるので、もともと1つの丸木舟だったのを切断して、丸い井戸側に転用したということがわかりました。なお、丸木舟として使用されていた時の縄をくくるための穴も確認できます(スライド73)。

これは古代と中世の井戸とを比較した図です(スライド74)。素掘りの、特に井戸側を設けない井戸というのが大半を占めます。ただし、飛鳥・奈良・平安時代だと全体の14%で井戸側を持つ井戸が見つっているのに対し、中世だとだいぶ減って1%となります。井戸側を持つ井戸というのは、集落の中で特殊な井戸だったということが言えるかと思えます。

また、古代の井戸の底からは完全な形の土器が出る場合があります(スライド75・76)。井戸の祭祀に関連した出土品と言えるかと思えます。こういう完

全な土器が出土する井戸もまたまれで、全体の井戸の中の12%でこういう完全な土器が出ています(スライド77)。

これは大沢谷内遺跡の井戸について、長軸の長さとお深さをプロットした図になります(スライド78)。赤く塗ってあるのが完全な土器が出た井戸で、四角は井戸側を設けた井戸です。この図からは、井戸側を設けた井戸や、大きかったり深かったりする井戸から完全な土器が出る場合が多い傾向がうかがえます。そういった大きな井戸であったり、井戸側を設けるような井戸が、集落の井戸の中でも特殊な井戸として利用されていて、そういう土器祭祀などを行っていたということが推測されます。

平安時代の資料として、ベルトにつける飾り具、石帯が出土しています(スライド79)。

ほかに珍しい資料として越州窯系青磁が出ています(スライド80・81)。越州窯というのは中国の浙江省の窯で焼かれた資料で、新潟県内では大沢谷内遺跡を含めて数遺跡でしか出土していません。北九州ではある程度出土しているということですが、北陸や東北地方では非常に限られる珍しい資料ということです。

これは緑釉陶器で、緑色の釉をつけた焼き物です(スライド82上)。また灰釉陶器といって灰色や白っぽい色の釉をつけた焼き物も出ています(スライド82下)。これらは猿投窯の製品ということがわかっています。緑釉陶器や灰釉陶器も大沢谷内遺跡では一定量出土していますが、一般集落ではあまり出ない資料と言えます。

これは黒色土器の内面の写真ですが、こういう渦巻状の文様を持つ土器も出ています(スライド83)。これもあまり見ない資料です。公的な、役所に関連するような遺跡で出たりする資料かと思えます。

あと墨書土器です(スライド84)。「寺」や「田」と書かれた墨書土器も出ています。

次にこの時期のアスファルト関連資料についても少し見てみます(スライド85)。左側は須恵器の杯と呼んでいる、お茶碗の写真です。上が外面で、下が内面の写真です。内側にアスファルトが付着しており、外側にも点々とアスファルトがついている資料です。右は須恵器の台を持つお茶碗ですが、内側には漆がべったりとついていて、外側にも少し漆が付着しています。パレットとして利用した可能性があります。飛鳥時代のところで少し話に出ましたが、こういう漆要具も出ています。アスファルトや漆を

平安時代にも利用していたことがうかがえる資料か
と思います。

あと土錘、網につける錘や、製塩土器、塩をつくっ
た土器、それと羽口、鍛冶に関連する資料なども飛
鳥時代・奈良時代前半と同様に出土しています（ス
ライド86）。

また鉄斧も出土しています（スライド87左）。左側
は上から見た写真で、右側が横から見た写真です。
これなどは木の伐採や加工などに使った可能性があ
ります。なお、鉄を研いだ砥石も多く出ています（ス
ライド87右）。

これは木の下駄の未成品ですので、木を加工する
技術者も存在したということがわかります（スライ
ド88）。

鎌倉時代・室町時代

鎌倉時代と室町時代に入ります。掘立柱建物が21
棟、井戸が140基、水田跡が31基、ほかに畑の跡も見
つかっています（スライド90）。この赤いところが掘
立柱建物です。中世、鎌倉時代・室町時代になると
遺跡の範囲が広がっていて、奈良時代の後半以降、
谷の南側がおもに使われていたのですが、中世にな
ると谷の北側も含めて利用されるようになります。
8・9区の周りでは四角い水田の遺構が31基見
つかっています。この点線で示したのが微高地、高い
所です。高い所に建物をつくって、その周りの少し
下がった部分で水田を行っていたことが確認されて
います。

これは先ほどと同じ図・写真になりますが、中世
の水田はこの四角い範囲で、周りには用排水の溝が
掘られています（スライド91）。このように整然と配
置された水田遺構が見つかっています。

古代と中世の種実同定ではイネが定量見つかって
います（スライド92右）。なお、自然科学分析や遺構
などからは、中世になって水田が拡大したと推測さ
れます。また、中世ですとアワだとかナス、ウリ、
エゴマなど畑の作物も確認されています。

これは中世の遺構です（スライド93）。木製品など
が出土しています。これはその拡大写真で、このよ
うに鋏なども出ています（スライド94）。また、井戸
からは四角い形状の鉄製品なども出ています（ス
ライド95）。

この紫色の部分が井戸になります（スライド96）。
井戸の中からは櫛だとか筭、髪を整える道具なども
出ています。右上は、曲物を転用した井戸側の写真
です。これがその井戸側として転用されていた曲物

です（スライド97）。この曲物にはアスファルトが付
着していました（スライド98）。油井の可能性も推測
されます。

また、播鉢の内面にもアスファルトがついていた
りします（スライド99）。これも播鉢ですが、その外
側にも内側にもアスファルトが付着しており、アス
ファルトの容器として利用していた可能性も推測さ
せる資料です。あと荷札木簡にもアスファルトが付
着していました（スライド99左下）。これなどは籠と
しても使ったのではないかと指摘されています。

これは先ほども出てきた鋏です（スライド100上）。
一木でつくった鋏です。こちらは柄がはめ込み式の
鋏です（スライド100左下）。これは木の楔です。こ
ういった農具関係の資料も出ております。なお、こ
れは桜の皮を使った結合補助具です（スライド100右
下）。

これは田下駄です（スライド101右）。水田の遺構
とともに、こういった農具関係の資料が出ています。
また、下駄の未成品も出ているので、中世にも木製
品をつくっていたということがわかります（スライ
ド101左）。

井戸からは櫛や箸なども出ています（スライド
102）。鉄製品では、刀子や鉄鋸、釘、釣針なども出
ています（スライド103上）。これは蓋状鉄製品です
（スライド103左下）。用途がまだはっきりしないの
ですが、こういった珍しい蓋状の鉄製品なども出てい
ます。右下は砥石です。

これは先ほども写真であった筭で、骨角製です（ス
ライド104左）。髪を整える資料ですね。あと栗形と
呼んでいる刀の鞘に付けてひもを結ぶ骨角製品も出
ています（スライド104右）。非常に精巧な加工がさ
れています。こういったものも一般集落ではまず見
られません。中世も非常に有力な集落であったとい
うことがわかります。

漆器も多く出土しています。これは黒い漆と赤い
漆で文様を描いた漆器です（スライド105左）。この
内面にはアスファルトがびっしりとついているの
で、アスファルトの容器として利用した可能性がある
資料と言えます。また、漆器の未成品も出ていま
す（スライド105右上）。このことから、漆器を製作
していたことがわかります。これは糸巻具で、機織
の道具も出ています（スライド105右下）。

このように、大規模な水田耕作を行っている一方、
木の加工や織物など、様々な生業を行っていたこと
が、飛鳥時代も含めてですうかがえます。新津丘

陵の近くにある遺跡ということで、そういう特徴があるのだろうと推測されます。

おわりに

去年の11月ですが、圃場整備の関係で大沢谷内遺跡の周辺について試掘・確認調査を行いました。これまで説明していたのが、大沢谷内遺跡全体の中のこの部分です（スライド107）。この部分の調査成果についてこれまでお話をさせていただきました。大沢谷内遺跡の範囲は広くて、調査した以外の周辺の状況はまだ不明な部分が多いのですが、この微高地で建物が見つかったので、この斜めに走る道路に沿って微高地がずっと丘陵のほうへのびていくのかなと思っていました。そして、圃場整備の関係で遺跡の南側についても調査を行った結果、この紫色で塗った範囲に微高地が存在するのがわかりました。途中で曲がって南西方向にのびていくということがわかりました。なお、赤い所で古代の遺構や遺物がたくさん出たので、遺跡の範囲を今後修正しないといけないのですが、そういう発見がありました。

あと、大沢谷内遺跡は室町時代、今のところ15世紀前後を境に、ぱったり資料が出なくなります。その原因ですが、江戸時代の絵図の中に鎌倉潟が描かれていて、大沢谷内遺跡もその中に入ると推測されます（スライド108）。下はA地点とB地点をつないだ土層ですが、この真ん中の層は未分解有機物をたくさん含んだ層、いわゆるガツボ層になります。発掘調査をしていると、このように黒い土、ガツボ層が中世の遺構を覆うような形で確認されます。ですので、15世紀前後に、おそらく河川の氾濫などを受けて湿地帯ができ、深い部分については潟になったのだと推測されます。そして、それが原因で大沢谷内遺跡の集落については廃絶、移動を余儀なくされたのだろうと考えています。

最後にアスファルト関連の話ですが、これは金津の「石油の世界館」の近くで石油が滲出している露頭の写真です（スライド109）。小・中学校の理科の授業で見学に来る場合も多いのですが、周辺は新津油田地帯で、明治から大正時代にかけて石油業で栄えた場所です。金津村の中野貫一氏は、日本の石油王とまで呼ばれました。

最近では、2007年に新津油田は地質学から見て日本の貴重な自然資源であるとして地質100選に認定されました。また、2018年には新津油田金津鉞場跡として国史跡にも指定されています。我が国の近代エネルギー産業の発展を知る上で、重要な遺構が良

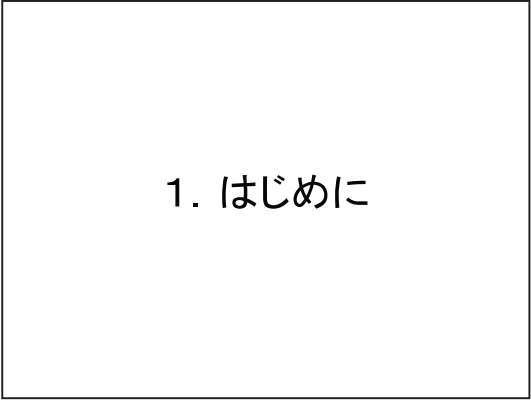
好な状態で多く残されているということで、新潟市では5か所目となる史跡になったということです。整備もされているので、機会がありましたらハイキングがてら行っていただければと思います。

これまで見てきたように、大沢谷内遺跡は縄文時代から中世にかけて石油資源が利用されていたことがわかる遺跡です。縄文時代から近代まで石油がこの地域で脈々と受け継がれてきた重要な天然資源であったことを今に伝える遺跡であると言えるでしょう。

以上で、報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



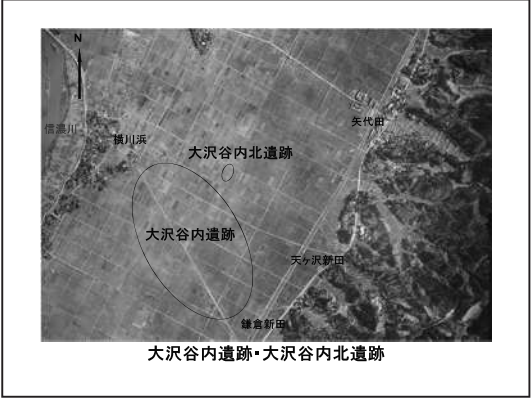
スライド1



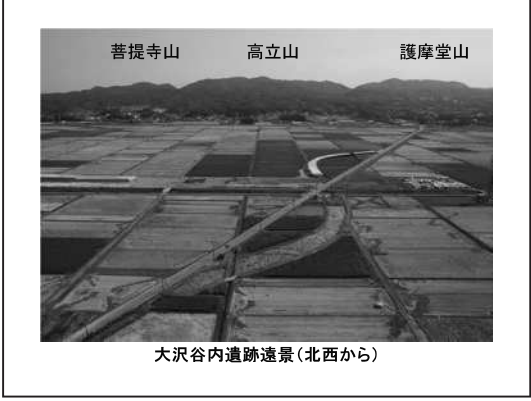
スライド2



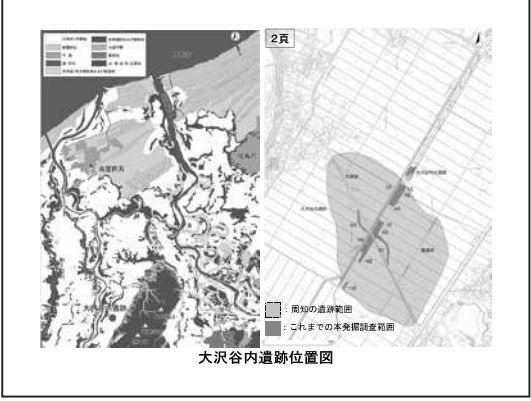
スライド3



スライド4



スライド5



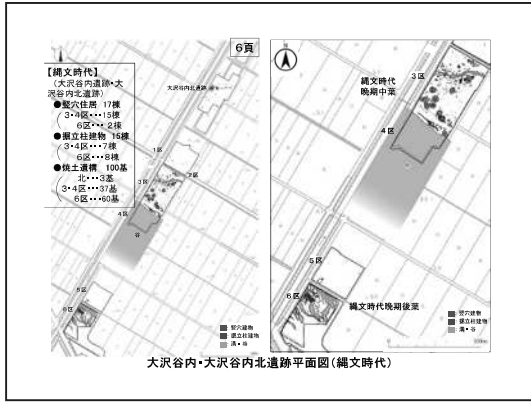
スライド6



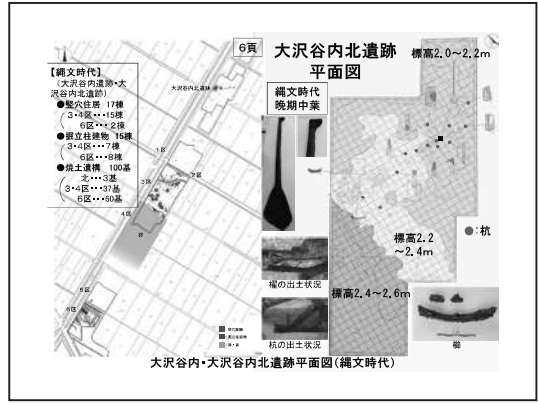
スライド7



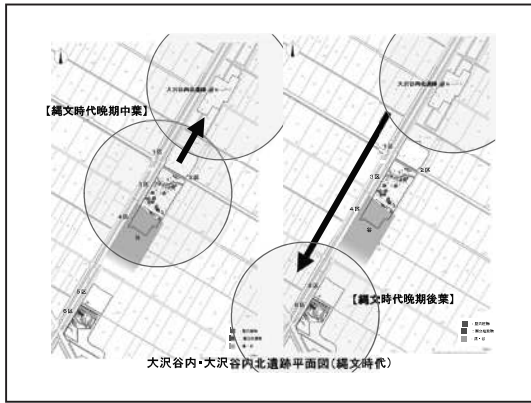
スライド8



スライド9



スライド10



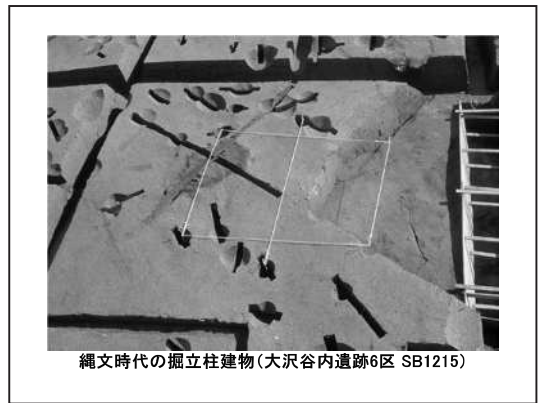
スライド11



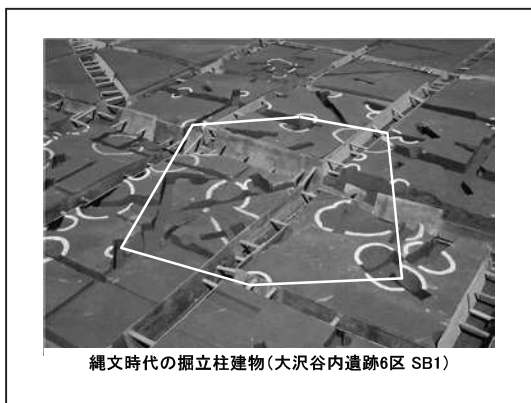
スライド12



スライド13



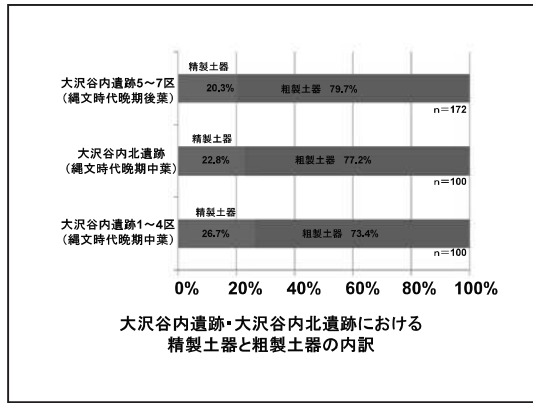
スライド14



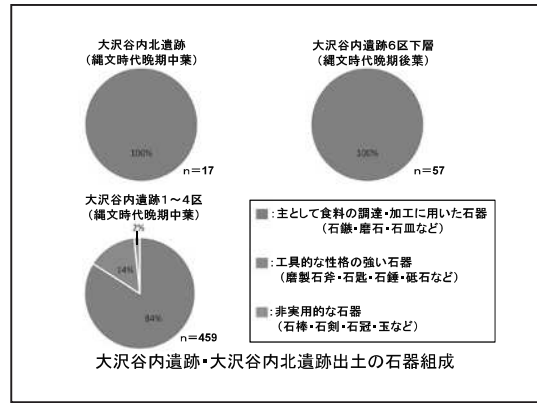
スライド15



スライド16



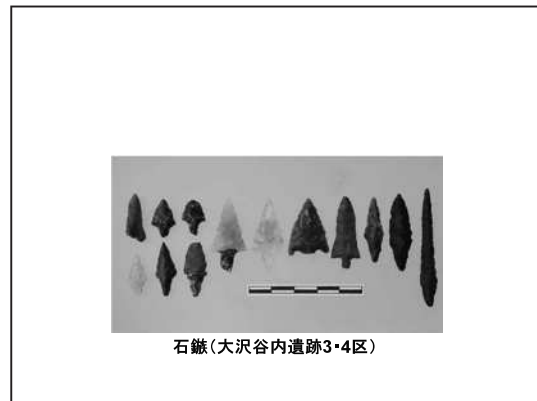
スライド17



スライド18



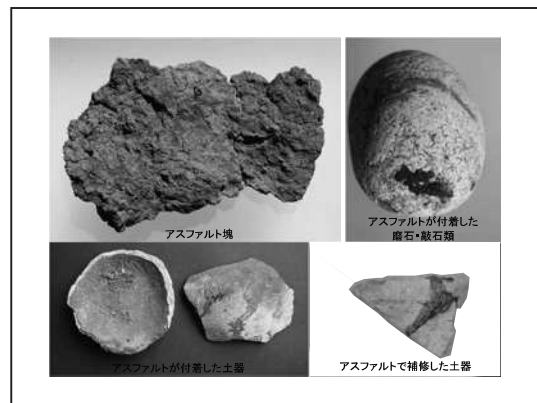
スライド19



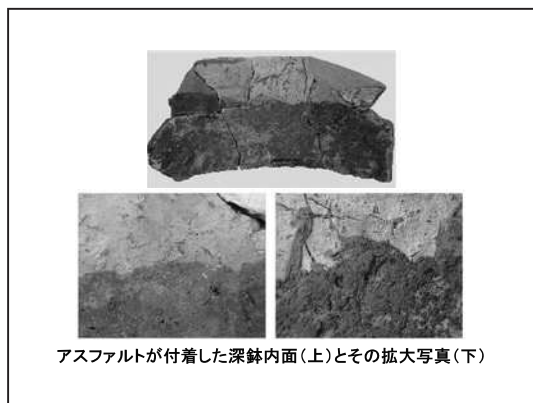
スライド20



スライド21



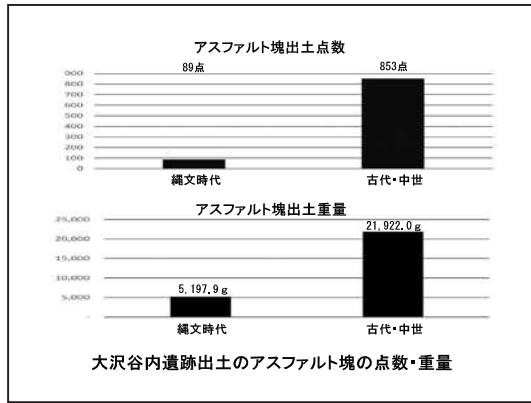
スライド22



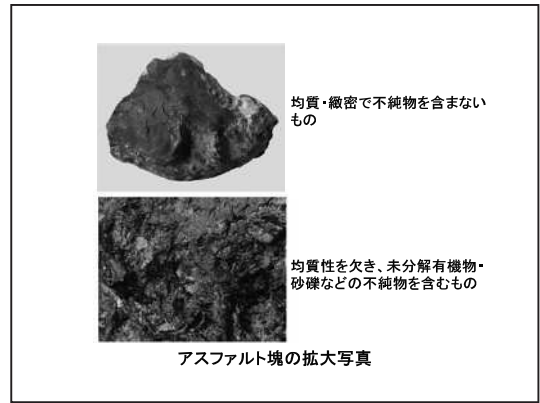
スライド23



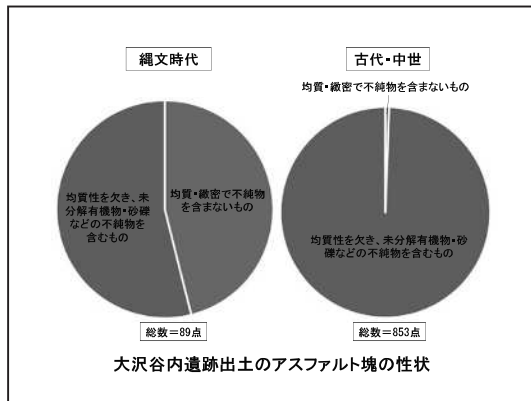
スライド24



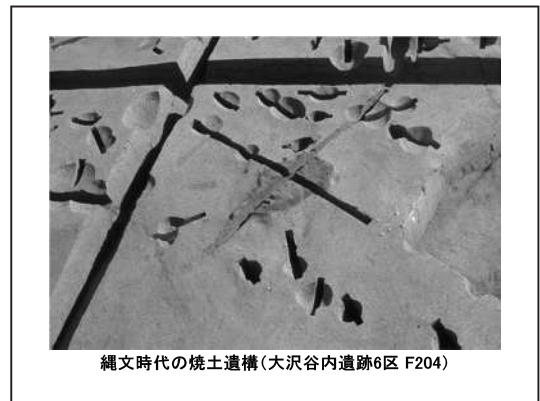
スライド25



スライド26



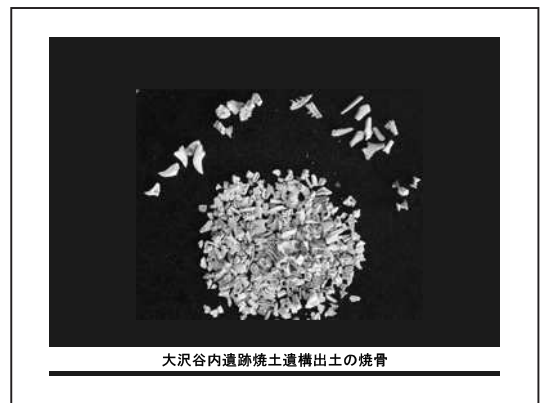
スライド27



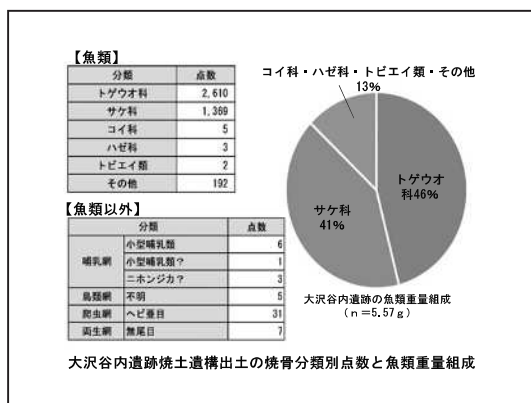
スライド28



スライド29



スライド30



スライド31

花粉分析による樹木花粉トップ5 (時代別)

	縄文時代	弥生・古墳時代	古代・中世
1	ハンノキ属	ハンノキ属	ハンノキ属
2	ブナ属	スギ	スギ
3	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属

木製品の樹種トップ5 (時代別)

	縄文時代	古代・中世
1	ハンノキ属ハンノキ亜属	スギ
2	トネリコ属	クリ
3	ヤマグワ	ケヤキ
4	エゴノキ属	ハンノキ属ハンノキ節
5	ヤナギ属	ヒノキ

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の花粉・樹種

スライド32

3. 弥生時代・古墳時代

スライド33



大沢谷内遺跡出土の弥生土器

スライド34



大沢谷内遺跡出土の弥生土器

スライド35



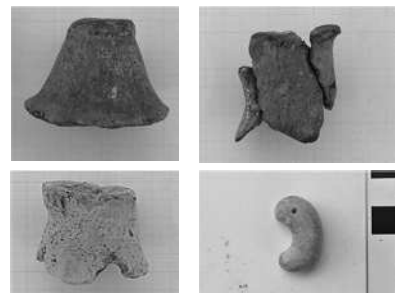
大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器

スライド36



大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器

スライド37



大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器・玉

スライド38



大沢谷内遺跡と周辺の古墳

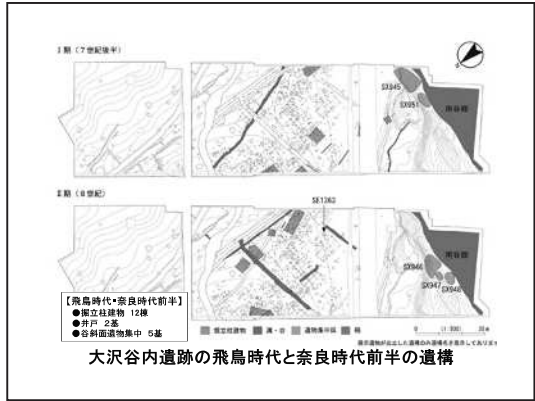
スライド39

4. 飛鳥時代・奈良時代 前半(古代)

スライド40



スライド41



スライド42



スライド43



スライド44



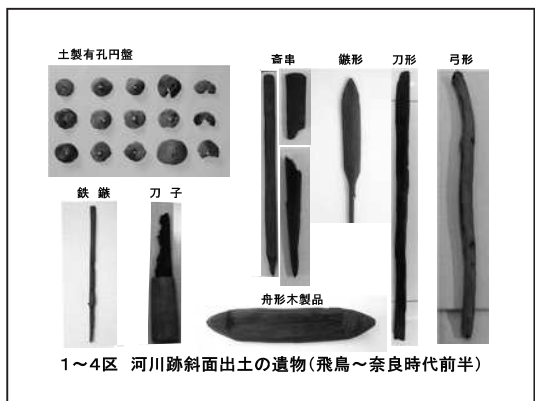
スライド45



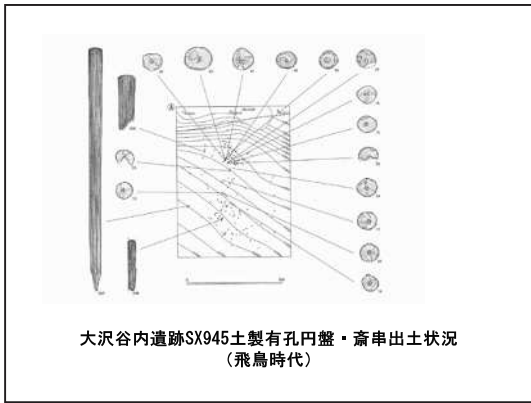
スライド46



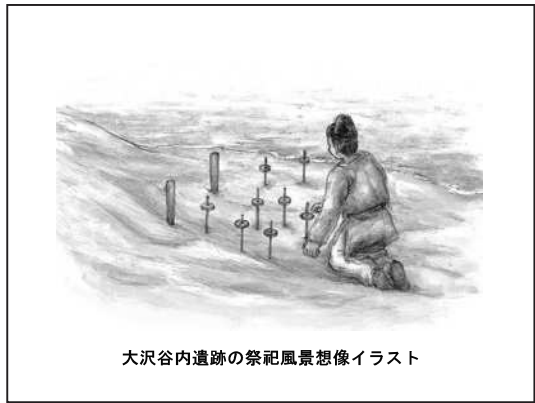
スライド47



スライド48



スライド49

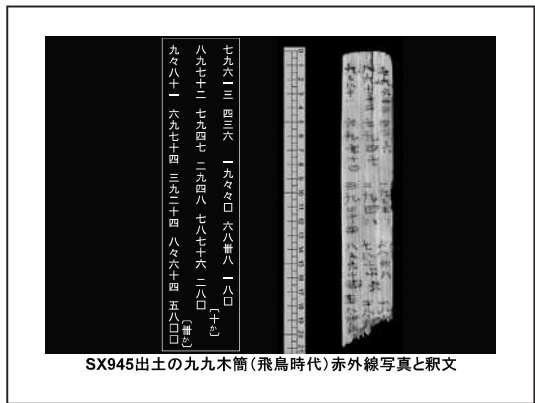


スライド50

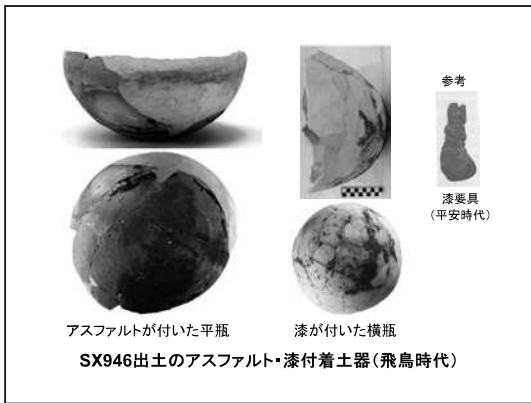
伊ノ島と行隆崎遺跡・大沢谷内遺跡・基命寺遺跡(上経市)における石もな祭祀遺物の比較

遺跡	遺物	伊ノ島	行隆崎	大沢谷内	基命寺
祭祀遺物	石もな	○	○	○	○
	石もな(小)	○	○	○	○
	石もな(大)	○	○	○	○
	石もな(中)	○	○	○	○
土製有孔円盤	土製有孔円盤	○	○	○	○
	土製有孔円盤(小)	○	○	○	○
	土製有孔円盤(大)	○	○	○	○
	土製有孔円盤(中)	○	○	○	○
高申	高申	○	○	○	○
	高申(小)	○	○	○	○
	高申(大)	○	○	○	○
	高申(中)	○	○	○	○

スライド51



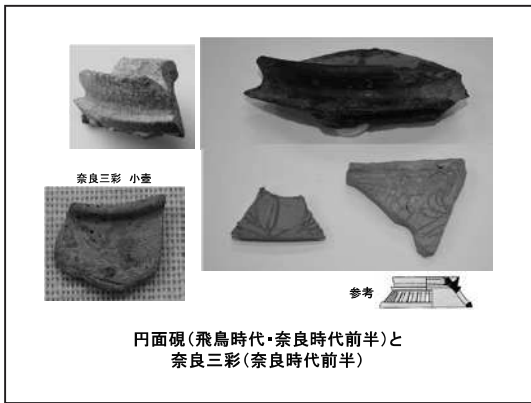
スライド52



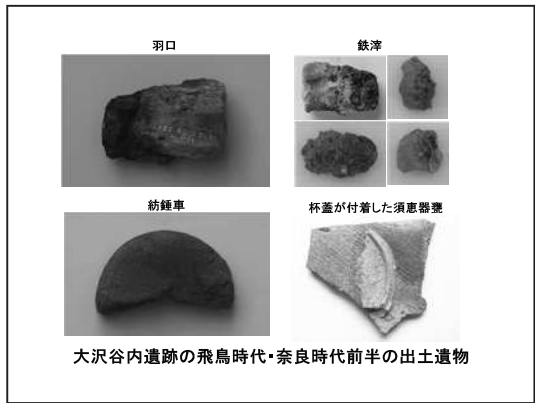
スライド53



スライド54



スライド55



スライド56



丸木舟を転用した飛鳥時代の井戸
(大沢谷内遺跡4区 SE1363)

スライド57

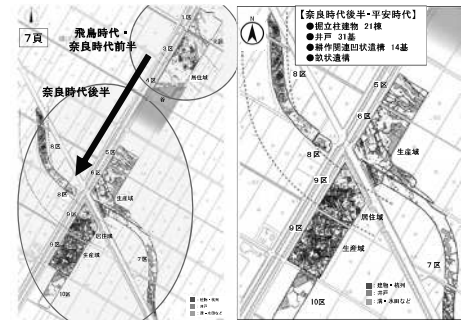


大沢谷内遺跡出土の飛鳥時代の土器

スライド58

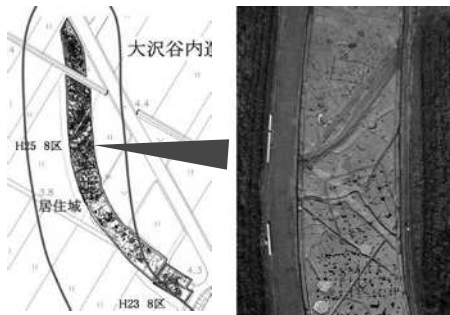
5. 奈良時代後半・ 平安時代(古代)

スライド59



大沢谷内遺跡平面図(古代-飛鳥時代・奈良時代・平安時代-)

スライド60



大沢谷内遺跡8区空中写真(上は北)

スライド61



平安時代の掘立柱建物(大沢谷内遺跡8区 SB4001)

スライド62



平安時代の掘立柱建物の柱穴断面
(大沢谷内遺跡8区 SB4001)

スライド63



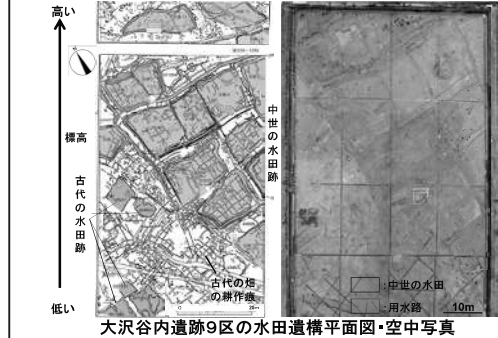
掘立柱建物跡(平安時代・SB4001)柱穴

スライド64



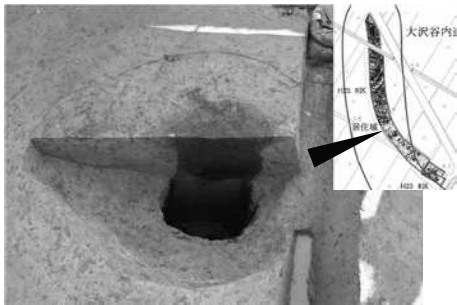
掘立柱建物跡(平安時代・SB4001)周溝

スライド65



大沢谷内遺跡9区の水田遺構平面図・空中写真

スライド66



井戸(平安時代・SE2383)

スライド67



平安時代の井戸断面(大沢谷内遺跡8区 SE2383)

スライド68



平安時代の井戸(大沢谷内遺跡9区 SE3416)

スライド69



平安時代の井戸断面(大沢谷内遺跡9区 SE3416)

スライド70



平安時代の井戸側(大沢谷内遺跡9区 SE3416)

スライド71

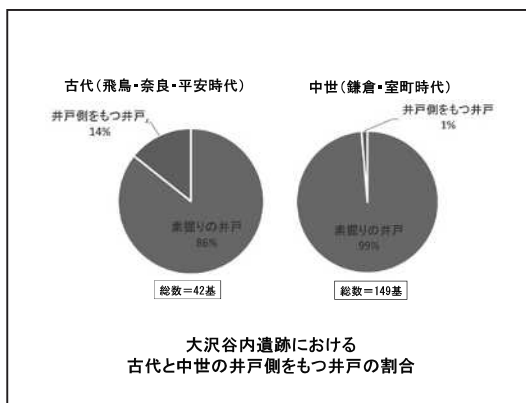


平安時代の井戸側(大沢谷内遺跡9区 SE3416)

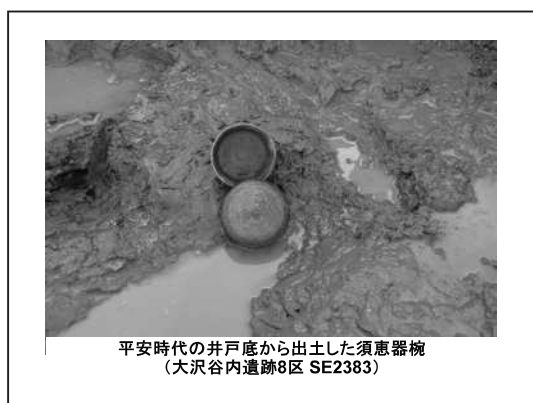
スライド72



スライド73



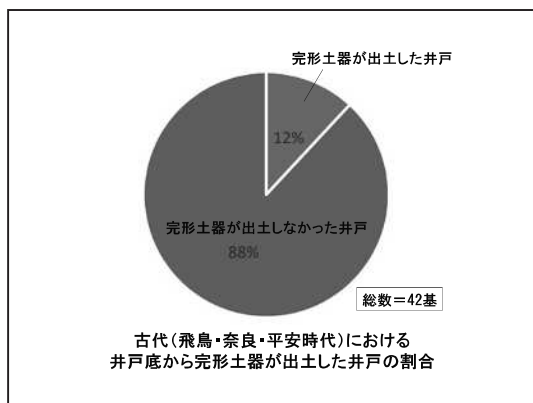
スライド74



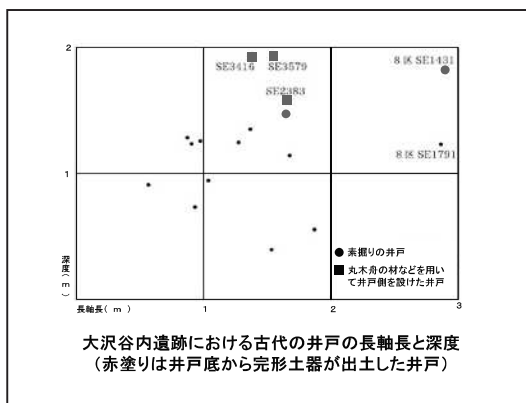
スライド75



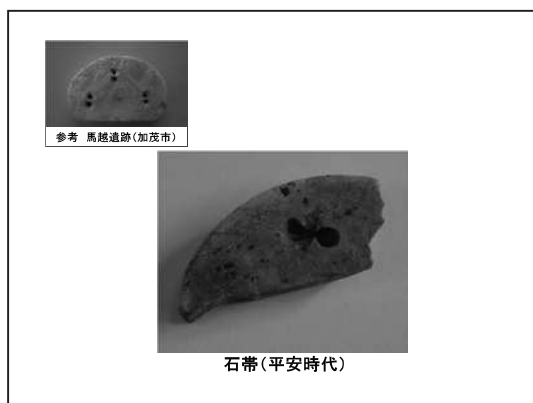
スライド76



スライド77



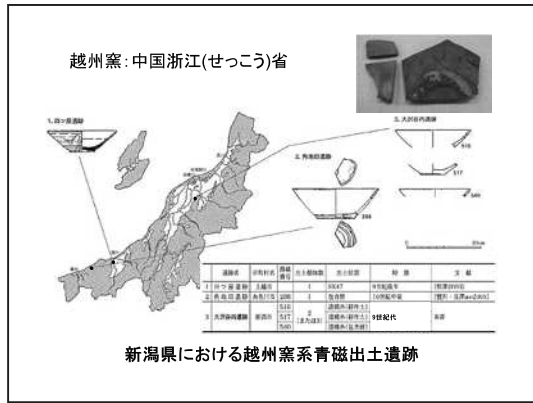
スライド78



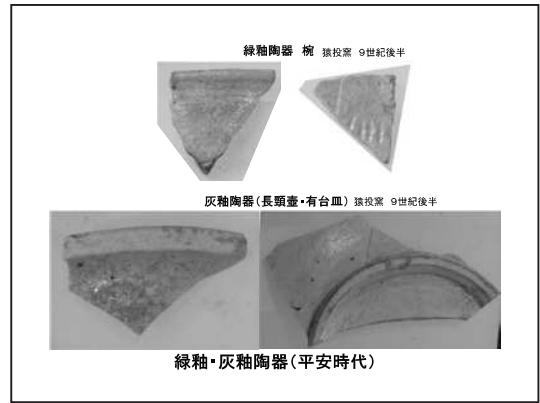
スライド79



スライド80



スライド81



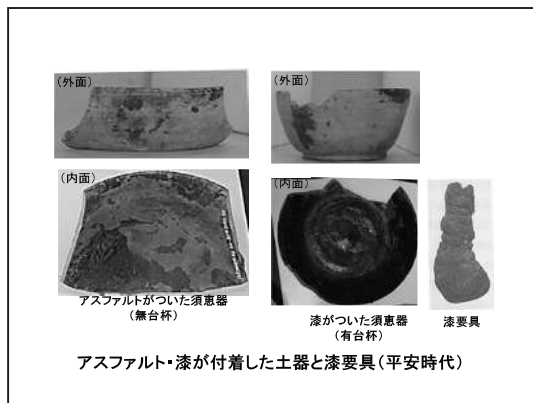
スライド82



スライド83



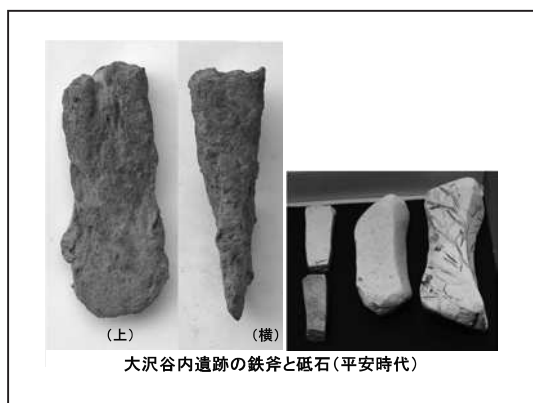
スライド84



スライド85



スライド86



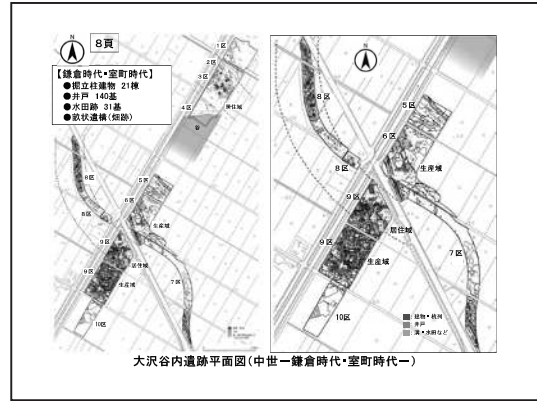
スライド87



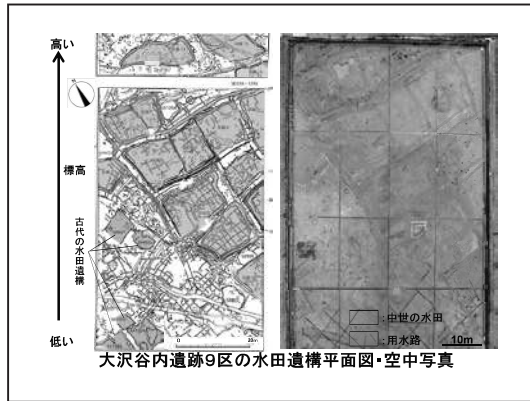
スライド88

6. 鎌倉時代・室町時代 (中世)

スライド89



スライド90



スライド91

花粉分析による樹木花粉トップ3 (時代別)

縄文時代	弥生・古墳時代	古代・中世
1 ハンノキ属	ハンノキ属	ハンノキ属
2 ブナ属	スギ	スギ
3 コナラ属コナラ属属	コナラ属コナラ属属	コナラ属コナラ属属

種実同定による草本種実トップ15 (時代別)

草本種実	
古代	中世
1 ウリ属	イヌビロ属
2 オニバズ	イネ
3 スギ属	アワ
4 ホタルイ属	キカラスウリ
5 タデ属	ウキヤガラ
6 カナムグラ	アザ
7 ナス	マメ科
8 キク属科	ホタルイ属
9 ヒヨウタン属	シソ属
10 ツリフネソウ	ササガ属
11 トウガン	タデ属
12 マメ科	ナス
13 イネ	ウリ類
14 ウキヤガラ	スギ属
15 イヌホウズキ	エゴマ

木製品の樹種トップ5 (時代別)

縄文時代	古代・中世
1 ハンノキ属ハンノキ属属	スギ
2 トネリコ属	クリ
3 ヤマブタ	ケヤキ
4 エゴノキ属	ハンノキ属ハンノキ属
5 ヤチキ属	ヒメキ

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の花粉・樹種・種実

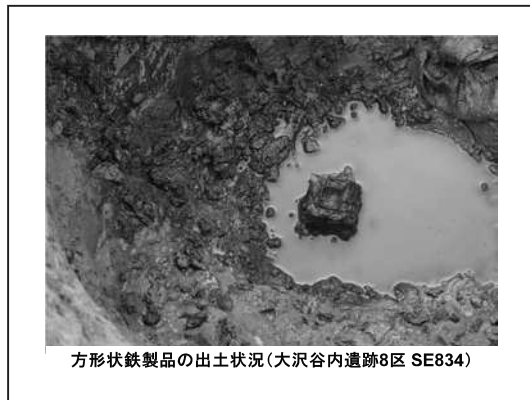
スライド92



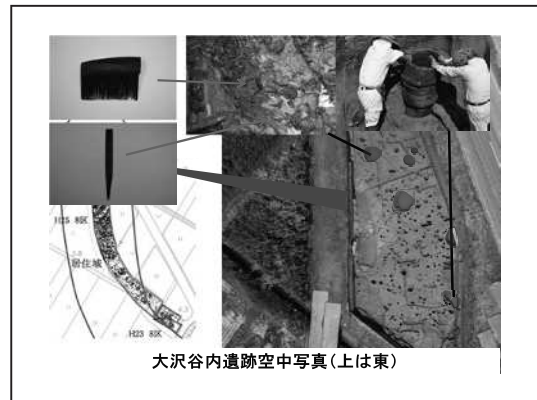
スライド93



スライド94



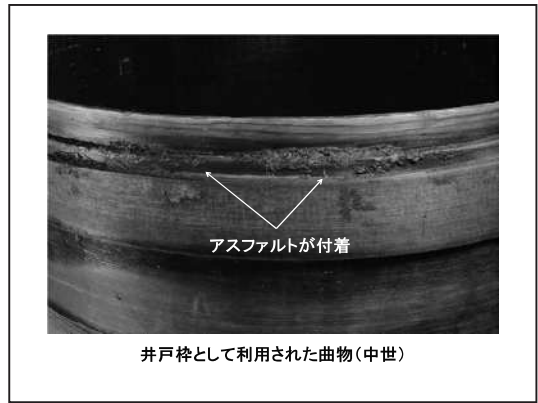
スライド95



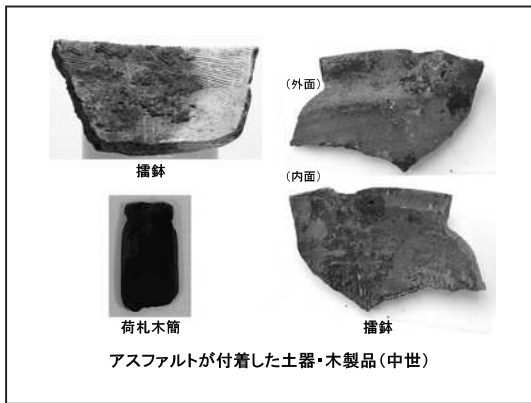
スライド96



スライド97



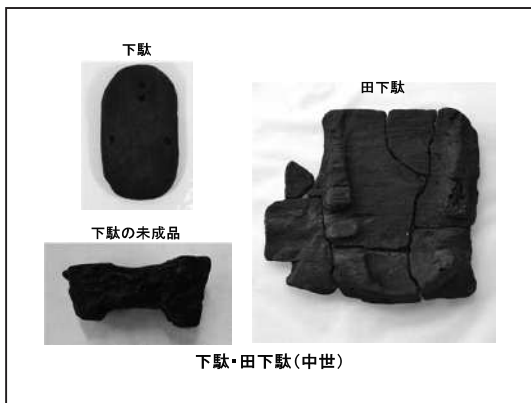
スライド98



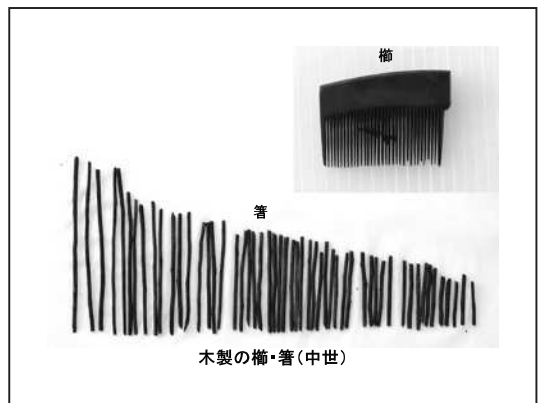
スライド99



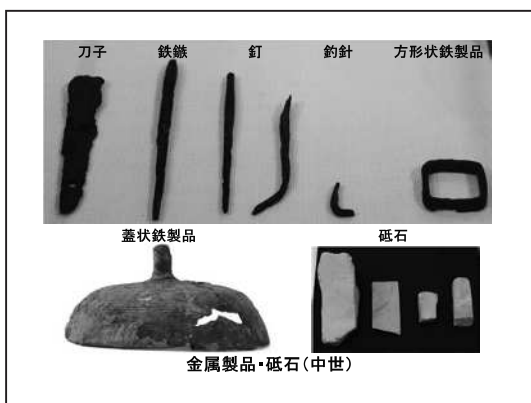
スライド100



スライド101



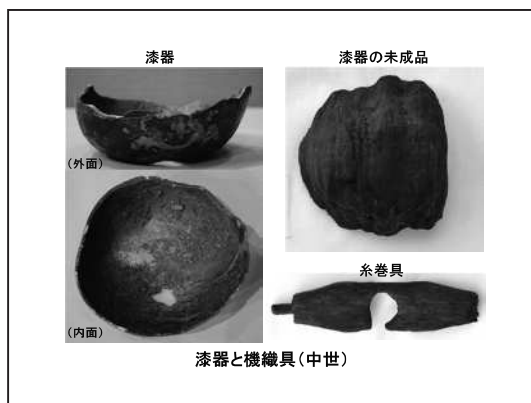
スライド102



スライド103

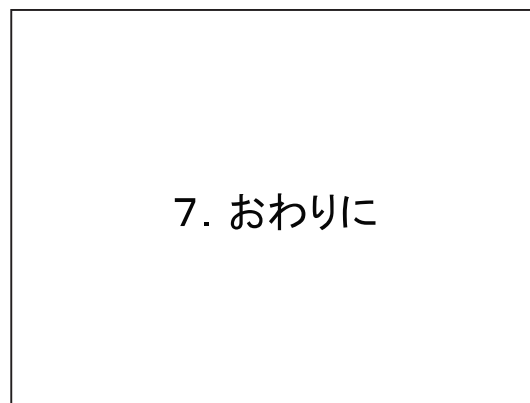


スライド104

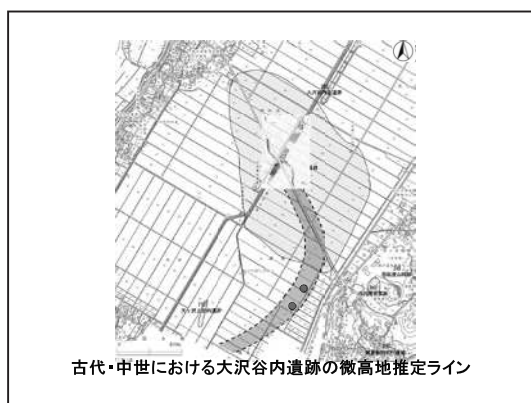


漆器と機織具(中世)

スライド105

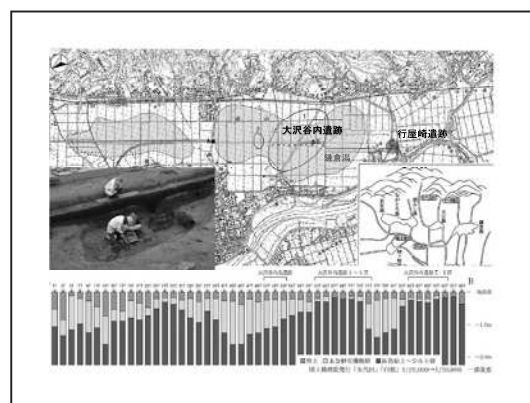


スライド106



古代・中世における大沢谷内遺跡の微高地推定ライン

スライド107

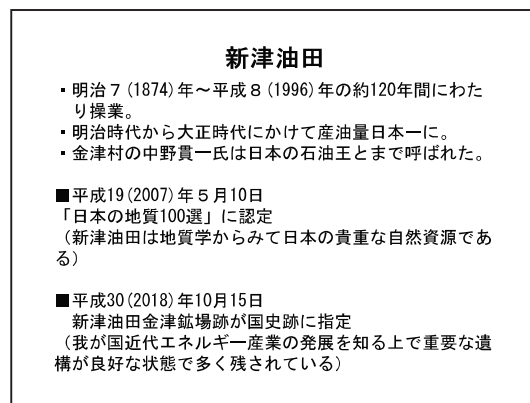


スライド108



史跡新津油田金津鉱場跡周辺の石油滲出露頭

スライド109



新津油田

- ・ 明治7 (1874) 年～平成8 (1996) 年の約120年間にわたり操業。
- ・ 明治時代から大正時代にかけて産油量日本一に。
- ・ 金津村の中野貴一氏は日本の石油王とまで呼ばれた。

■平成19 (2007) 年5月10日
「日本の地質100選」に認定
(新津油田は地質学からみて日本の貴重な自然資源である)

■平成30 (2018) 年10月15日
新津油田金津鉱場跡が国史跡に指定
(我が国近代エネルギー産業の発展を知る上で重要な遺構が良好な状態で多く残されている)

スライド110



・ 大沢谷内遺跡……縄文時代からすでに新津丘陵周辺で石油資源が利用されていたことがわかるとともに、石油が近代までこの地域で脈々と受け継がれてきた重要な天然資源であったことを今に伝える。

スライド111

写真・図出展一覧

- スライド 6 右・7・9・10左・11・17・18・25・27・31・32・60・66・74・77・78・90・92：新潟市教育委員会2020『大沢谷内遺跡VI』から作成
スライド10右：新潟市教育委員会2010『大沢谷内北遺跡』から作成
スライド39・49・108：新潟市教育委員会2012『大沢谷内遺跡II』から作成
スライド42：新潟県南蒲原郡田上町教育委員会2015『行屋崎遺跡』から作成
スライド50：画 野崎裕美 (市文化財センター)
スライド61・81・96：新潟市教育委員会2015『大沢谷内遺跡IV』から作成